今月の窓

距離と時間の感覚

先日，コメの集荷状況を中心とした九州の農協でのヒアリングに同行する機会があった。第一線の方のお話を伺うのは半年ぶりのことでもあり，少し緊張して出かけた。

県都から各駅停車で約１時間半。最寄りの駅にかなり早めに着き，昼食をとった駅前の店で農協の本所への道をきいた。「歩いて20分ぐらい」との話であり，歩いて行くことにした。

周囲の景色を見ながら人影のない道を歩くこと20分強。目的の建物に着き，汗を拭きながら「駅から歩いてきましたが，私たち以外に歩いている人は見かけませんでした」と話した。その途端，相手をしてくれた農協の方が目をまるくして「へーっ」と言い，周囲の農協職員の人たちに「オーイ，駅から歩いてきたんだってー」と大きな声で言った。その瞬間，爆笑。

当方はびっくり。歩くことがそんなにおかしなことなのだろうか，と思うぐらいであった。県の課長さんは「連絡をもらえば車で迎えに行ったのに…」。どうも，歩いて20分位の距離は車を使うのが普通らしい。道を教えてくれた人は「歩いて」と教えてくれたのだが，この地域では珍しい部類の人なのかもしれない。距離と時間についての感覚は，かなり違うものだ。

笑いから始まったこともあって，ヒアリングは順調に進んだ。産地としてのブランド作りに７割以上の組合員が参加している状況もあり，コメの集荷率は90％以上だという。笑いの理由は，このような事業の順調さにもあったようである。主要な事業が元気な組織は，関連する事業も含め全体が元気である。

ヒアリングの終わりに，交換した名詞を見直しながら，「農林中金の研究所の人がコメの調査もするのか」と聞かれた。「経済事業と信用事業はもともと密接な関係にありますから」とは答えたが，このような質問が出るのは両事業の間の時間距離が広がっているから，とも思えた。そうであるとすれば，両者のあり方をめぐる議論は心して行う必要がある。なぜなら，尺度の異なる同士の議論は，経営体としての農協の組織全体にひびきかねないからである。

今秋のＪＡ全国大会議案は，経済事業改革がひとつの論点となっている。今月は，大会議案に関連したテーマを取り上げた。経済事業との距離感を考える一助になれば幸いである。

（㈱農林中金総合研究所常務取締役　田中久義・たなかひさよし）